

大学院研究室だより

平成24年度 修士論文題目と執筆者氏名

博士前期課程

日本語学専攻

修士論文

現代小説の会話文にみられる女性語 …………… 雨宮 沙江

日本語の脱形容詞動詞のアスペクトについて…………… 藤原翔太郎

タイ人日本語教師のビリーフの特徴とその要因

－日本語母語教師との比較から－………… 村山 智明

日本語学習者の外来語の習得

－語彙テストとビリーフ調査の結果をもとに－………… 富田 彩月

大学院活動報告

■言語科学研究科20周年記念 言語教育公開講座

2012年9月15日（土）10：00～17：00、本学7号館クリスタルホールにて、言語教育公開講座『2つのことばを使うこと―豊かな社会を目指して、日本語教育』を開催しました。午前の部では、日本語教育の分野に関するワークショップ、午後の部では、講演会を実施しました。また講演会終了後、講演者および聴講者の交流を目的とした懇親会を本学カフェテリアにて行いました。

【午前の部】

岩本遠億教授による「日本語教育文法（再）入門」では、初級で躓く原因の1つとなる「やり、もらい」について取り上げ、「内・外」という概念を取り入れることの必要性を参加者と共に考えました。青木ひろみ准教授による「日本語教授（再）入門」では、日本語教員養成課程の科目「教授法」で学んだことをどのように国内外の教育の実践の場で生かすことができるのかについて考え、実際に「授業計画を立てる」というグループワークを行いました。

【午後の部】

宮川繁教授（マサチューセッツ工科大学）による基調講演「ことばと文化とアイデンティティ」では、早期バイリンガルと非早期バイリンガルの言語能力が脳内のどこに位置づけられるか、両者の違いはどのような能力の違いとして発現するか等について、最新の脳研究の成果が紹介され、また御自身の経験を交えて、バイカルチャーを生きるとはどのようなことなのか、お話をいただきました。ロバート・デシルバ教授は「英語から日本語へ、日本語から英語へ」と題し、翻訳論の立場から、日英両言語の相違点をもたらす問題の事例を取り上げ、論じました。木川行央教授は「方言を話すとき、共通語を話すとき」という題のもと、方言と共通語の使用意識と使い分けについて歴史的変遷をたどり、現在の日本語母語話者にとって、それらが対人関係を

指示する指標となっていると論じました。堀場裕紀江教授は、「ことばと自己認識、他者認識」について公演しました。文化とアイデンティティ、言語使用とアイデンティティについて心理学、社会学分野の理論的枠組みを紹介した上で、第二文化教育学分野において、二言語使用とアイデンティティに関する問題の理解がどのように変遷して来たかを論じ、宮川教授、デシルバ教授、木川教授が取り上げた問題が、どのように関連づけられるかについて説明しました。

■言語科学講演会・アспектフォーラムNo.3

2013年3月5日(火) 13:30~17:30、本学2号館2-201教室において、言語学・日本語学・言語習得・言語教育・言語心理学・応用言語学などの分野に興味がある方を対象に、言語化学講演会・アспектフォーラムNo.3『語彙的・文法的アспектの構造と心理』を行いました。

現在、日本語におけるアспектの研究では、テイル形の意味の違いを、状態、動態、動き、変化といった対立的概念で捉えるのが一般的です。今回のフォーラムは、言語を形式的に捉えようとするアプローチと動きと変化という対立を言語習得や言語使用の実態から捉えようとするアプローチといった異なった視点からの講演と研究発表を行い、それらの接点について考える場となりました。

基調講演には、白井恭弘(ピッツバーグ大学教授・言語化学会会長)氏を招き、最新の研究とともに「言語習得・処理・障害における普遍性はどこから来るのか ~テンス・アспектを中心に~」と題した講演をしていただきました。

【プログラム】

講演「意味のダイナミクス：アспект研究の変遷と課題」

岩本 遠億(神田外語大学教授)

発表「脱形容詞動詞の限界性と構造」

藤原 翔太郎(神田外語大学大学院生)

発表「日本語母語話者のテンス初期習得に現れる『タ』の様相について」

久保 一美（日本大学教授）

基調講演「言語習得・処理・障害における普遍性はどこから来るのか

～テンス・アスペクトを中心に～」

白井 恭弘（ピッツバーグ大学教授・言語科学会長）

■British Hills セミナー

2012年6月2日（土）～3日（日）、福島県岩瀬郡に位置する英国疑似体験施設British Hillsにて、セミナーを開催しました。博士前期課程6名、博士後期課程1名、研究生2名、合計9名が研究発表を行い、議論を展開しました。

■浜風祭におけるポスター発表

2012年10月21日（日）10：00～16：00、本学3号館にて、博士前期課程の学生6名、博士後期課程の学生1名が、研究内容について、以下のタイトルでポスター発表を行いました。

| | |
|-------|---|
| 安中 妙 | 「のだ」と「んだ」 |
| 照屋 規恵 | A Case study of Japanese College EFL Students Learning to Retell a Narrative Story through strategy-based instruction |
| 富田 彩月 | 日本語学習者の外来語の習得—意識アンケートと語彙テストの結果をもとに— |
| 藤原翔太郎 | 限界性とスケール性 |
| 村山 智明 | タイ人日本語教師のビリーフの特徴とその要因—日本語母語教師との比較から— |
| 山下 陽介 | 限定のとりたてて詞「だけ」「しか」「ばかり」の使用実態—書き言葉と話し言葉の比較— |
| 和気 圭子 | 中上級学習者の日本語説明文読解における困難点— think-aloud法による事例研究— |

■海外での日本語教育実習

2012年2月25日（月）～3月15日（金）の日程で、海外日本語教育インターンシップを行いました。国際交流基金の援助を受け、中国・天津にある南開大学外国語学院日本語学科へ、博士前期課程の学生2名（大場絵美、尤慧婷）を派遣しました。当該日本語プログラムの担当教員の指導のもと、授業の見学・分析および授業実践を行いました。また、活動ジャーナルの提出及び、報告書の作成を行いました。

■大学院オープンウィーク（学内・一般対象）

1. 大学院オープン授業

2012年7月2日（月）～6日（金）の期間中、実際に大学院で開講されている授業のうち、以下の9科目を開放しました。

【科目名】

社会言語学研究、日本語教育文法研究、言語科学演習G、日本語学研（統語・語彙・意味）、日本語学研究（音声・音韻）、英語教育学研究、日本語教育学研究、応用言語学研究、英日対照言語学（統語）

2. 大学院進学支援特別授業

2012年7月7日（土）に、以下の内容で、国内大学院進学に必要な技術習得のための特別授業を行いました。

【講座】

1. 日本語アカデミックリーディング入門
2. 日本語アカデミックライティング入門
3. 研究計画書とは何か

■大学院説明会

以下の日程で、博士前期課程及び博士後期課程の入試説明会を実施しました。

- 第1回 2012年7月7日(土) 15:00~16:00 学内・一般対象
- 第2回 2012年12月13日(土) 12:35~13:30 学内対象
- 第3回 2012年12月22日(土) 15:00~16:00 学内・一般対象

・大学院進学説明会及び講演会

2012年12月22日(土) 本学2号館にて、以下の内容で進学説明会及び講演会を実施しました。

1. 実践講義「研究計画の考え方」(木川教授)
2. 日本語学講演「消えた形容詞!?一言語パズルを通して日本語の謎に迫る」(岩本教授)
3. 大学院のカリキュラムと入学試験の説明
4. 日本語教育学講演「書くということ」(西講師)

平成24年度開講科目、担当者

修士課程

—英語学専攻・日本語学専攻—

【共通科目群】

| 授業科目 | 担当教員 | 授業科目 | 担当教員 |
|----------|----------------|----------------|--------|
| 言語科学研究 | 大学院専任教員 | 言語科学演習 A | 長谷川 信子 |
| 言語科学演習 B | 堀場 裕紀江 | 言語科学演習 C | (休講) |
| 言語科学演習 D | 岩本 遠億 | 言語科学演習 E | 木川 行央 |
| 言語科学演習 G | Robert DeSilva | 言語科学演習 H | 遠藤 喜雄 |
| 統計処理法 | 渡辺 雄一 | 英語アカデミックライティング | 遠藤 喜雄 |

| 授業科目 | 担当教員 |
|------|---|
| 修士研究 | 長谷川 信子、堀場 裕紀江、木川 行央、岩本 遠億、遠藤 喜雄、Robert DeSilva、田中 真紀子 |

【言語研究科目群】

| 授業科目 | 担当教員 | 授業科目 | 担当教員 |
|-------------------|-------|------------------|--------|
| 英日対照言語学 (音声・音韻) | 遠藤 喜雄 | 英日対照言語学 (統語) | 長谷川 信子 |
| 英日対照言語学 (語彙・意味) | 岩本 遠億 | 英語学研究 (統語・語彙・意味) | 遠藤 喜雄 |
| 英語学研究 (現代英文法) | 遠藤 喜雄 | 日本語学研究 (音声・音韻) | 木川 行央 |
| 日本語学研究 (統語・語彙・意味) | 岩本 遠億 | 日本語学研究 (方言・日本語史) | 木川 行央 |
| 日中対照言語研究 | 井上 優 | 日韓対照言語研究 (院) | 浜之上 幸 |
| 日西対照言語研究 | 江藤 一郎 | 言語習得研究 | (休講) |
| 言語学特論 | (休講) | | |

【言語教育研究科目群】

| 授業科目 | 担当教員 | 授業科目 | 担当教員 |
|------------|--------|-------------|------------|
| 応用言語学研究 | 堀場 裕紀江 | 第二言語習得研究(院) | 関屋 康 |
| 評価法研究 | 堀場 裕紀江 | 英語教育学研究 | Park Siwon |
| 早期英語教育研究 | 田中 真紀子 | 英語指導技術 A | (休講) |
| 英語指導技術 B | (休講) | 小学校英語指導技術 A | 長田 恵理 |
| 早期英語指導技術 B | (休講) | 日本語教育学研究 | 堀場 裕紀江 |
| 日本語教育文法研究 | 岩本 遠億 | 日本語教育教材研究 | 堀場 裕紀江 |
| 言語教育学特論 | (休講) | 日本語指導技術(特) | 青木 ひろみ |
| 日本語指導技術 II | 青木 ひろみ | | |

【コミュニケーション言語文化研究科目群】

| 授業科目 | 担当教員 | 授業科目 | 担当教員 |
|-------------------|-------|------------------|-------|
| コミュニケーション理論 | (休講) | 異文化コミュニケーション研究 A | 小坂 貴志 |
| 異文化コミュニケーション研究 B | (休講) | スピーチ・コミュニケーション研究 | (休講) |
| スピーチ・コミュニケーション教授法 | (休講) | 日本研究 | 窪田 高明 |
| 言語文化研究 | 遠藤 喜雄 | 比較文化論 | (休講) |
| 比較文学研究 | (休講) | 談話分析研究 | (休講) |
| 社会言語学研究 | 矢頭 典枝 | 英語音声表現研究 | (休講) |

博士後期課程

一言語科学専攻一

| 授業科目 | 担当教員 | 授業科目 | 担当教員 |
|-----------|--------|-----------|--------|
| 言語学特論演習 | 長谷川 信子 | 言語学特殊研究 | (休講) |
| 言語学特殊研究 A | 長谷川 信子 | 言語学特殊研究 B | 岩本 遠億 |
| 英語学特論演習 | (休講) | 英語学特殊研究 | 遠藤 喜雄 |
| 英語教育学特論演習 | (休講) | 英語教育学特殊研究 | (休講) |
| 言語教育学特論演習 | 堀場 裕紀江 | 言語教育学特殊研究 | 堀場 裕紀江 |
| 日本語学特論演習 | (休講) | 日本語学特殊研究 | 木川 行央 |

大学院学術研究員活動報告

◆大倉 直子 2005年3月 本研究科博士課程満期退学

2010年3月 博士号取得

研究テーマ： 授受動詞と文法化

内 容： 博士論文では「～てあげる」を中心とした受益構文についてまとめたが、これに「～てくれる」「～てもらう」を加えた3つの授受動詞・補助動詞の研究を行っている。具体的には、これらの構文の統語構造を明らかにすると共に、語彙動詞が補助動詞として使われるようになるということを、言語に広くみられる文法化と捉え、他の文法化現象と比較しながら、そのメカニズムの一部を明らかにすることを目指す。

◆綿貫 啓子 2005年3月 本研究科博士課程満期退学

2011年3月 博士号取得

研究テーマ： 談話の文法

内 容： 後置文の分析は、これまで言語研究において異なる分野とされてきた「語用・情報構造」と「統語」、さらには「音声（韻律）」の間をつなぎ、従来の「文文法」の分析の枠を超えて、言語研究における部門間の関係を理論と記述の両面から考察する格好の機会を提供する。後置文の分析を中心に、話し言葉に特徴的な文体の機能と構造を分析し、談話の文法構築へと繋げることを目指す。

口 頭 発 表： 綿貫啓子 2012「後置文の情報構造と統語特徴」『日本言語学会第144回大会予稿集』pp. 258-263. (2012年6月16日、東京外国語大学)

◆李 榮 2009年3月 本研究科博士課程満期退学

研究テーマ： 文の複雑さ、および読み手の言語知識と作動記憶がL2日本語のテキスト理解に与える影響—日本語上級学習者と日本語母語

話者との比較—

内 容： 本研究は、テキスト要因と読み手要因の両方が、第二言語(L2)のテキスト理解にどう関わるかについて検証することを目的とする。韓国語と中国語を母語とする中上級のL2日本語学習者を対象とし、文の統語的複雑さと共に、読み手のL2統語知識と作動記憶の容量、そして母語背景といった要因を取り上げ、テキスト理解との関連を調べた。さらに日本語母語話者との比較を通し、L2読み手の特徴を明らかにする。

口 頭 発 表： 「日本語説明文のL2読み—文構造の複雑さとテキストタイプの影響—」2012世界日本語教育大会（2012年8月19日、名古屋大学）

◆山方 純子 2009年3月 本研究科博士課程満期退学

研究テーマ： 第二言語としての日本語テキスト理解における語彙推測に語彙知識とトピックへの馴染み深さが与える影響

内 容： 本研究では、第二言語(L2)としての日本語テキスト理解における語彙推測に焦点を当て、語彙推測の成否と推測における知識源の使用・成功に、語彙知識、テキスト内容理解、テキストのトピックへの馴染み深さがどのように関与するかを検証する。韓国語もしくは中国語を母語とする中上級レベルのL2日本語学習者を対象とし、日本語母語話者と比較することで、L2学習者の語彙推測の実態を明らかにする。

口 頭 発 表： 「L2日本語学習者の語彙推測—文章中の既知語率と知識源使用の関係—」2012世界日本語教育大会（2012年8月19日、名古屋大学）

◆西 菜穂子 2010年3月 本研究科博士課程満期退学

研究テーマ： 第二言語としての日本語作文に関わる能力

内 容： 習熟度の異なる日本語学習者と日本語母語話者を対象に、タスクの要求度の違いが作文の言語的・コミュニケーション的特徴

に与える効果を検証することを目的として研究を進めている。また、タスクの要求度に加えて、語彙力、読解力、および書き手の内的要因（メタ認知知識、作文経験、作文に対する意識）と作文力の関係も調査し、さらに、学習者と母語話者の産出プロセスの調査も行う予定である。

論 文： 堀場裕紀江・山方純子・西菜穂子・李榮・田所直子(2012)「語彙知識の多面性はL2日本語読解にどうかかわるか」『神田外語大学言語科学研究センター紀要 Scientific approaches to language』第11号、pp. 215-239.

共同発表： 堀場裕紀江・西菜穂子・松本順子・李榮・山方純子(2012)「日本語学習者が目指すべき語彙力とは－2種類の語彙テストにおける学習者と母語話者の比較から－」2012年度日本語教育学会春季大会にて共同口頭発表(2012年5月26～27日、拓殖大学) 堀場裕紀江・西菜穂子(2012)「語彙知識の多面性と発達について－第二言語学習者と母語話者の比較から－」JSLs 2012・言語科学会第14回年次国際大会にて共同口頭発表(2012年6月30日～7月1日、名古屋大学)

ポスター発表： 堀場裕紀江・西菜穂子(2012)「日本語学習者の語彙知識の多面性－母語、学習環境、および、語項目による影響－」2012世界日本語教育大会にて共同ポスター発表(2012年8月19日、名古屋大学)

◆町田なほみ 2001年 米国セントジョーンズ大学大学院修了
2005～2006年 本研究科研究生

研究テーマ： 児童英語教育のための教材研究と語彙クイズのあり方について
内 容： 公立小学校での英語活動用として2012年度に発行された『Hi, friends!』に収録されている語彙の特徴を捉えるための分析を行った。特に機能語に着目し、コミュニケーションの素地を養うという目的遂行にどのような役割を果たしているかを探った。また、250余名の実験結果から小学校英語活動で活用でき

うる語彙クイズのあり方：語彙の選定方法、絵や文字の使用の仕方を検証した。加えて、外国語能力開発センターでの大学生の英語力調査に関わる統計分析を補助した。

- ◆真鍋 雅子 2007年3月 本研究科修士課程修了
研究テーマ：ポライトネスの視点から見た中上級日本語学習者の発話－依頼と断りの発話行為より－
内 容：日本語の習熟度が異なる学習者に「依頼」と「断り」の発話タスクを与え、異なるタイプの場面と習熟度が学習者の発話産出に影響があるかどうかを調査した。また、日本語学習者が異なるタイプの場面における発話タスクを産出する際に、どのような困難が生じたかをポライトネスの視点から事例ごとに質的に分析した。
論 文：「ポライトネスの視点から見た中上級日本語学習者の発話－依頼と断りの発話行為より－」『言語科学研究』第19号、神田外国語大学大学院、2013年3月刊行予定

- ◆中村たか子 2007年3月 本研究科修士課程修了
研究テーマ：状態述語としての“VNする”
内 容：修士論文、その後の投稿論文・口頭発表で述べてきた“VNする”の状態性について、記述的検証から得られる一般化を求める。具体的には、文末で「～スル」の形をとると不自然な「所有する」「所属する」「保有する」「保持する」などの“VNする”について、「国語動詞の一分類」（金田一：1950）にある「第四種の動詞」に関する先行研究、また近年の影山、益岡を中心とする叙述に関する研究にその知見を求め、これらの“VNする”の「動詞の分類」における位置づけを目指す。

- ◆田所 直子 2010年3月 本研究科修士課程修了
研究テーマ：日本語の語彙習得に関わる要因と学習活動

内 容： 第二言語としての日本語語彙習得に関わる様々な要因を探り、それらの要因と学習活動との関係を調べ、効果的な語彙学習法を提案する。修士研究で行ったタスクタイプと繰り返しの要因に加え、大学における専門語彙の習得に効果的な学習活動について実証的研究を行う。また、学習活動の形態にも注目し、教室の内と外を結んだ表現活動の実践とその効果についても考察する。

論 文： 「第二言語としての日本語語彙学習におけるタスクの効果－タスクタイプと繰り返しの比較を通して－」『言語科学研究』第19号、神田外語大学大学院2013年3月刊行予定

共同発表： 水上弘子・渡部みなほ・川名恭子・齋藤智美・佐藤貴仁・田所直子・田中敦子「初級前半クラスにおけるインターネットを利用した表現活動－振り返りアンケートから見る『日本語かきこ』－」日本語教育国際研究大会名古屋2012（2012年8月18日、名古屋大学）

◆内山 工 2010年3月 本研究科修士課程修了

研究テーマ： 意欲的に英語活動に取り組む教員に必要な資質を探る質的研究－校内研究を通して－

内 容： 「意欲的に英語活動に取り組む教員の資質を探る」実践研究である。対象は、東京都内の小学校に勤務する教員経験年数・英語活動経験年数・年齢・性別の異なる4人の教員である。研究方法は3つである。先ずアンケート調査で研究授業前と研究授業後の英語教育指導における自信の変容を調べた。次に、授業観察により児童指導力や英語運用力を調査した。最後に、指導案中の指導技術関連の基本語彙から、その教員の英語に関する興味・関心を含む嗜好や特性を調べた。結果、担任に必要な能力として、「児童指導力」と「英語運用力」だけではなく、「教員の嗜好や特性を生かして授業展開することができる授業力」が重要であることが明らかになった。

口頭発表： 第12回小学校英語教育学会（JES）千葉大会 内山工 2012（2012年7月15日、千葉大学）

掲載発表：『千葉大会用要綱集』、pp. 66

◆松本 陽子 2010年3月 本研究科修士課程修了

研究テーマ： 聴解における語彙タスクの影響－中国語を母語とする日本語学習者を対象として－

内 容： 教師アンケートの結果に基づき、聴解におけるプレタスクとしての語彙学習の影響を検証した。対象は中国語を母語とする日本語学習者67名である。調査の結果、語彙タスクがテキストの内容理解を促進することが明らかとなった。また、母語提示よりも日本語提示のほうが理解を促進するという傾向が見られた。これにより、聴解におけるプレタスクとしての語彙学習では、語と音との結びつきを考慮する必要性が示唆された。

研究発表： 「聴解における語彙タスクの影響－中国語を母語とする日本語学習者を対象として－」第3回KUIS日本語教育研究会（2012年12月8日）

< 投稿規定 > _____

1. 投稿資格

本大学院科目担当教員、修了生、在学生、及び、大学院紀要編集委員会が適格と認めた者。

2. 採用について

投稿いただいた原稿には、審査があります。採否に関しては、大学院紀要編集委員会に御一任下さい。また、採用に当たって修正をお願いする場合があります。

3. 論文提出について

- ・原稿部数：3部
- ・提出期限：2013年9月24日（火）正午
- ・和文論文には英文タイトルもつけて下さい。
- ・査読の結果、修正をお願いする場合の再提出の期限は別途お知らせ致します。
- ・ご提出いただいた原稿は原則として返却致しませんので、ご了承下さい。
- ・採用決定後にデータファイルのご提出をお願いすることになります。
- ・なお、執筆・入力に関しては、次の「執筆要項」をご参照下さい。

ふるってご応募下さい。

論文提出先・問い合わせ先

〒261-0014千葉市美浜区若葉1-4-1

神田外語大学大学院共同研究室内

大学院紀要編集委員会

tel/fax 043-273-2971

e-mail kiyo-g@kanda.kuis.ac.jp

< 執筆要項 >

1. テーマは言語研究、言語教育、コミュニケーション研究に関するものとする。投稿部門は以下の通り。投稿する際、どの部門にするか明記すること。

- ・ 研究論文
- ・ 書評
- ・ 研究ノート
- ・ 実践報告
- ・ 資料

2. 原稿の書式は以下の通り。

使用言語：日本語もしくは英語

用紙設定：A4版横書きワープロ原稿、38字×30行

余白：上35mm、下左右30mm

ページ数の上限：研究論文・書評は18枚以内、研究ノート・実践報告は10枚、資料は原則として18枚

【和文】

論文名：14pt（論文名の上を2行空ける）

執筆者名および所属：12pt

和文要旨：10pt（400字以内）

キーワード：10pt（5語以内）

本文：11pt

注：10pt（本文中の注は、右肩に通し番号「1, 2, 3, . . .」を付け、論文末に記載。ワープロの脚注機能は使わない）

参考文献：10pt

資料：指定なし

【英文】

以下を除き同上

論文名：14pt（重要語句の先頭を大文字にする）

英文要旨：10pt（200語以内）

3. 原稿の区切りと見出し

原稿は章、節、項などに区切る。章の見出し番号は、通し番号とする。節の見出し番号は、「1.1」、「1.2」とし、行の左に書く。見出しの前はスペースをとり、見やすくする。

4. 図表は、それぞれ「図1」「図2」、「表1」「表2」と番号をうち、タイトルをつける。

5. 表記については、原則としてローマ字はヘボン式を用い、アルファベットは半角文字、数字は算用数字を使用する。